

第6回日本認知症予防学会学術集会 発表

題名；笑顔出現頻度を数値化して参加型狂言教室における QOL 向上効果を見える化する

氏名；増田洸司¹⁾、柳谷朗²⁾、木村千恵³⁾、熊田智根³⁾、佐々木明子¹⁾、佐藤知栄実¹⁾、杉山妙¹⁾

所属；¹⁾日清オイリオグループ株式会社中央研究所、²⁾社会福祉法人 ばなな会（バナナ園グループ）、

³⁾社会福祉法人 ばなな会 グループホーム のんびりーす等々力（バナナ園グループ）

【目的】

介護施設ののんびりーす等々力では入居者の QOL 向上を目的とした参加型の狂言教室（1 回/月）を開催して 6 年目になる。狂言を学んで演じることは脳への刺激と運動を促すため、入居者の健康増進・ストレス解消に繋がると実感しているが、客観的には実証できていない。そこで、顔認証ソフト「画像センシングコンポ」により笑顔出現頻度を数値化して、狂言教室の QOL 向上の効果を評価した。

【方法】

狂言教室開始前から終了後まで、入居者の表情を家庭用ビデオカメラで撮影し、顔認証ソフト「画像センシングコンポ」で 1 秒毎の表情変化を客観的に評価・解析した。

【結果】

自ら前列に座って積極的に受講する 4 名の入居者に着目し、教室開始前から教室終了後までの表情を状況別に評価・解析した。笑顔の出現頻度を数値化した結果、『狂言師登場時』と『教室終了直後』に笑顔の増加傾向を示す入居者が多く見られた。一方で、笑顔の増加傾向を示さない入居者も確認された。また、『狂言教室中』の笑顔の出現頻度は減少傾向を示した。

【考察】

狂言師登場時の笑顔の増加は、入居者にとって狂言教室が特別なイベントであり、教室が始まる高揚感と非日常的な刺激から生じると考える。また受講中の笑顔の減少は教本などの見本がない状態で、狂言師の語り（言葉・抑揚）を聞き取って自ら演じるため、真剣な表情の増加から生じると考える。そして教室終了直後には達成感により、笑顔が増加したと考える。さらに狂言師の総評で褒められて承認欲求が満たされ、笑顔の増加に繋がったと考える。これまで客観的に評価できなかった狂言教室の QOL 向上効果を笑顔出現頻度の数値化により実証した。

表情変化を数値化することは QOL 向上の取り組み効果を客観的に評価できる技術として期待できる。

【倫理的配慮】

研究趣旨を入居者・入居ご家族・施設長に説明の上、個人が特定されない方法での発表に同意を得た。